

エアミス
Airmys

非実在探偵小説研究会

1_号



エアミステリ研究会

非実在探偵小説研究会 1号 目次

読み切り短編

星霜邸の変事（またはエレベーターの問題）

外嶋二歩 ————— 5

とあるバレンタインデーの裏話

鍵入 ————— 21

わたしだけを……。

麻里邑圭人 ————— 25

スカイ・ゴースト

桜居志連 ————— 153

P館の死体

青徽 ————— 176

有形の悪意

二丁 ————— 187

閉ざされた輪の中で

麻里邑圭人 ————— 223

リレー小説

君が処女じゃなくても平気

チームあじさい（タイガー田中、二成真司、永峰八尋、

————— 62

falpeimonochrome、稲羽実、筑地朱恵）

【特別付録】執筆陣によるネタバレ対談

————— 140

「君処女」解決編 私はこう予想した

————— 146

レビュー

「本格『淫弊』推理作家 飛鳥部勝則 全長編レビュー」 皐月あざみ

————— 48

企画

企画1 ニ〇一〇年度エアミス研ミステリランキング／エロミス研ランキング

————— 36

企画2 ミステリヒロインランキング

————— 172

企画3 ベストワトソンランキング

————— 219

表紙・扉ページイラスト ウスダアヤ

リレー小説

君が処女じゃなくても平気

チームあじさい

【プロローグ、あるいは終章という名の序章】

こんな吹雪の夜では、星どころか月すらも見えない。空を覆う暗黒からは、冷たい雪が容赦なく降ってくる。風も強く、眼前に広がる海はザワザワと騒ぎ狂っていた。

——目の前に死体がある。

これも連続殺人事件の単なる一幕であるとなんか思っただろう。被害者のうちの一人だと思っただろう。

……人が死んでいる様を見たのは初めてではなかった。しかしこの死体に限っては、今までのそれとは意味合いが全く違っていた。

——雪上に広がる真っ赤な花。

その中心には、真っ赤なマントのようなコートを纏った死体があった。いや、そうではない。元々は降り積もった処女雪と同じ、純白のコートだったはず……つまり、このコートは血を吸って赤く染まったのだ。

冬に狂い咲く死体の顔は見えない。——いや、見えないというのは、やや正確さを欠く。

——そこに首が存在しなかった。

本来そこにあるべき人間のシンボルが、その死体には欠けていた。雪原の花は、首がそぎ落とされていた。

そして、それだけではなかった。首が断ち切られている時点で十分に異様だったが、それだけではなかった。

その純白の——否、真紅のコートの足元には、やはりあるべきものが見えなかった。

以前見た、そのコートの下から伸びる白い足を思い出す。しかし今、そこには雪を染める赤色が広がるだけだった。

——足が切り取られている。恐らく、下半身ごと。

その光景に頭を抱えて蹲うすくまっていると、頭上から声が聞こえる。

「ハッハッハ、これはまた随分と壯観だね」

咄嗟に声がした方を見ると、そこには漆黒の影があった。禍々しい気を発散させながら、陽炎のように揺らめいている。

「面白い。首なし死体——しかも首だけではなく、下半身もないときたもんだ。折角の美人もこれじゃあ台無しだね——」

オサムには影が何を言っているのか理解できなかった。耳に入った言葉が頭の中で反響する。面白い。面白い。

面白い——

ふと気付けば屋敷からその死体に向かって、血で形作られた赤い路が出来ていた。死体を引きずったのだろうか。しかし、これはまるで……。

「——差し詰め、鮮血のヴァージン・ロードといったところか。美しい。最高の、生贄だ」

影は狂ったように高笑いする。面白いと笑う。嫌に耳に入る。

面白い。面白い。面白い。

——ぶっ殺してやる。そう、決めた。

【第一章】

1

坂田オサムは、唸り声で目を覚ました。

「うー……」

その声の主は真っ青な顔で隣に座る稲羽紫いなばゆかりで、そこは車の中だった。

冬の山道に揺れるステーションワゴン。その最後部に二人と荷物と機材が乗っていた。この積み方は道路交通法の諸々に違反しているのではないかとオサムは思ったが、こんなことで妙なケチをつけて『アルバイト』に支

障をきたすわけにはいかなかった。オサムは「せまい」と文句を言う紫を黙らせ、無理やりに押し込んだ。

「うわっふー……、オサム吐きそう。これ、ボク……リバースする……」

「だから俺は言ったんだ」オサムは紫を睨む。「車の中で小説を読み出すなんてどうかしてる。飲み込め、ファイト」

この友人は車が動き出すのと同時に、動物のマークがついたノベルスをバッグから取り出し、読み始めたのだ。オサムの忠告は彼のその小さな手で払われた。その六時間後がこの光景である。

「だって……綾辻先生の待望のシリーズ新作が出たんだよ。仕方ないじゃんか……」

「誰だよアヤツジさんて」

紫は真っ青になりながら、信じられないと言うような顔をする。

「おい、がんばれー。もうちょっとで着くからなー」

運転しているガツシリとした筋肉質な体格の中年男がルームミラー越しに言った。タレント事務所『オフィスR』の副社長、松江四郎である。そして彼はこのイベントの責任者でもある。

オサムは申し訳なくなり、頭を下げた。その光景を見て、松江とオサムの間のシートから、クスクスという控えめな可愛らしい声が聞こえてきた。

北沢麻由里である。

これが、オサムがこの『アルバイト』を失敗させるわけにはいかない理由の全てだった。

「紫ちゃん。もうちょっとだから頑張って」後ろを振り返り言う麻由里の声は、オサムにとっては鈴の音よりも綺麗なものだった。

オサムは一瞬見惚れていたが、すぐに咳払いと共に隣の紫を見遣る。折角あの麻由里ちゃんが声を掛けてくれているのだからと思っただが、彼は完全にダウンしており、耳にすら入っていないようだ。

「確か、もうそろそろ着くはずですよね」

麻由里は隣に座る女性に話しかける。マネージャーの島本敦子だ。年齢は麻由里よりも幾つか上だろうかとおサムは思った。

敦子は何か考え事をしていたのか、慌てて頷き、窓の外を指す。その指の先には大きなカーブが見えた。

「……あのカーブを越えたら見えてきますよ」

ややして、彼らに乗せたステーションワゴンが敦子の

言った、例のカーブに差し掛かった。大きく曲がるカーブの外側が崖になっているのが見えた。

落下防止用のガードレールが設置されているとはいえず、松江の上手とは決して言えない運転でオサムは肝を冷やした。ふと横を見ると、紫は俯き何か呪詛のようなものをブツブツと呟いていた。末期症状である。

「あっ、あれですよね、敦子さん」

先程のカーブをもものともせず、麻由里は楽しそうに言った。オサムがその視線の先を追うと、陽の光を反射させて白銀に輝く海原が広がっていた。

「うわ、すごい……」

思わずオサムは呟いていた。そして、成る程、これが銀河邸の由来か、と思った

目的の銀河邸が、大海を臨む岬の上に建っているということは知っていた。しかし、まさかこんな絶景が——しかも憧れの麻由里と共に——見られるとは。

「すごいね」

オサムの何気ない呟きに、後ろを振り返った麻由里が笑顔で答えた。

視線が合う。

オサムはつい横に目を逸らしてしまった。顔が熱くな

るのを感じた。

「……館館館、屋敷がボクを待ってる。りら荘氷沼邸斜め屋敷霧越邸、あはははは……」

隣では紫が可哀想なことになっていた。

*

北沢麻由里。

彼女は某O・V・Aの脇役として、声優デビューした。

しかし、それ以降は鳴かず飛ばず、いわゆる無名の声優だった。

だが、そんな彼女にも転機が訪れる。デビューから二年後、ある別のアニメの中でたった一話だけ、麻由里の演じるキャラクターにスポットをあてた回があった。

その一話で無名だった麻由里の声優としての演技力が評価された。更にその後には製作された続編ではヒロインばかりか主題歌まで担当、十代から二十代の若い男性ファンの間で爆発的な人気を博するに至った。たった一話の脇役から主役を射止めた、正にシンデレラ・ストーリー。そのエピソードから、麻由里のことを『まゆり姫』と呼ぶファンもいた。

ただその一方で、人気者故の問題も多く抱えていたようだ。聞くところによれば、麻由里はある熱狂的なファンによるストーキング行為にかなり苦しめられているらしい。それは今も現在進行形で続いているらしく、オサムは一ファンとして彼女のために何かできないものかといつも心を痛めていた。

そんな中、麻由里が自身の誕生日にシークレットイベントを行うことになった。しかも当日までどこで行われるか参加者には知らされない、誕生日兼ライブイベントだ。ちなみに麻由里の誕生日が二月十四日のバレンタインデーなのはファンの間では常識だ。言うなれば、それは誕生日パーティーとライブとバレンタインがあった煮になったスペシャルイベントだった。

加えてそれは、麻由里のセカンドアルバムの初回盤に封入された応募券による抽選という限定五十名の狭き門だった。勿論、麻由里の大ファンであるオサムも、学生へのけなしの金をはたいて、アルバムを五枚買いつけて応募したが、結果は残念ながら全部ハズレだった。後で聞いた話によれば、五枚どころかその十倍の五十枚を買った猛者ですらも、そのイベントには当たらなかったようだ。

……そして現在、オサムたちを乗せたステーションワゴンが向かう先——銀河邸こそが、そのシークレットイベントの会場だった。

何故、そのシークレットイベントの会場にオサムが向かっているか？　そこで、ようやく前述した『アルバイト』の話が出てくる。

このイベントのために空けていたオサム（当たるものだ）と信じていたのだ）のスケジュールは、当然のように空白になった。そこで、その期間を利用してアルバイトをしようとオサムは考えた。

まず目を付けたのが、コンビニで立ち読みしたアルバイト情報誌の片隅に載っていた、三泊四日のバレンタインイベントでの仕事だった。泊まり込みだから給料は良かったものの、何のイベントか詳しいことは一切記載されていない、ただ『銀河邸でのイベント』とだけ書いてあるという今思えばかなり胡散臭い代物ではあったが、オサムは特に深いことは考えずに応募した。ついでにどうせならと、奇矯な年下の幼なじみも誘った。

オサムの誘いに対し、幼なじみは二つ返事で了承した。彼は高校生だったが、学校は何かしら理由をつけてズル休みを言う。……もっとも、彼にはバイトとは別

の思惑があるようだった。恐らく『銀河邸』という建物そのものに興味があるのだろう。やはり奇矯な人間だ。

それから数日経って、オサムとその幼なじみ——稲羽紫、二人の許に採用の通知が送られてきた。

そして、バイト当日。その集合場所で北沢麻由里のイベントだと聞かされた時、オサムは夢かと思った。それ以降の記憶がしばらく曖昧だったが、紫曰く、まず彼を殴り倒し、その場でどこかの民族の雨乞いのような踊りを数分間踊っていたらしい。

そんなバカな。本当に紫は適当なことを言う——オサムは心底からそう思った。

*

オサムは車内に続いて、再び紫の声で起こされた。

ただし今回の彼のテンションは、先の車の中での紫とは正反対だった。

「ねえ、オサム！ ほら館だよ！ しかも雪山の中、しかも岬に建つお屋敷！ 来る道はたった一つだけ！」

オサムはベッドの上で頭をぼりぼりと掻きながら、寝惚け眼で辺りを見廻す。

ここは銀河邸の一室で、眠る前と変わらない光景があった。変わった点を強いて挙げるならば、もう一つのベッドのシャツがぐしゃぐしゃになっているのと、紫の異常とも言えるテンションの高さだった。

「いえっふー、テンション上がるね！ だってほら」

「うるせーバカ」

紫が何か言おうとしていたが、オサムはそれを一言で切り伏せる。「お昼寝したらテンション上がるとはおまえは子供か」と怒鳴りたくなつたが、生憎寝起きが悪く、そこまでの気力も湧かなかつた。

ややして、ようやく頭が回転してきたオサムは紫の格好を見て言った。

「……だいたい、何だよその格好」

「へへ、いいでしょ」そう言って、紫は笑顔でその場でぐるりと回ってみせる。白のフリルのスカートがふわっと広がった。上はデニムのジャケットの中に、白と黒のボーダーのシャツを着ている。「可愛いでしょ」

「いいか、おまえ。遊びに来てるんじゃないんだぜ。公私混合はやめなよ」

「仕事と区別がついてないのはオサムじゃん」折角のオシャレにケチをつけられたからか、紫は不機嫌そうに頬

を膨らませる。「車ん中で見たんだからね。バカみたい
に赤くなっちゃって」

「な、何言ってるんだよ」オサムはステーションワゴン
中でのことを思い出す。振り向いた麻由里の笑顔。「た
た、確かにファンではあるけどさ……」

紫はしてやったり、と言いたげな顔をする。

「ボクは別にまゆりんとは言っていないけどねー」

紫はさっきまで寝ていたらしいベッドに勢いよく腰掛
けた。ふわりとスカートが広がる。……げっ、こいつべ
チコートまで履いてやがる。

「と、とにかく。遊びに来たんじゃないからな」

オサムが誤魔化すように言う。

「わかってるよ。でも、今日は特に仕事はないんでしょ。

明日からのスケジュールの確認ぐらいだっけ？」

「ああ。ただ今日の夜の食事は、俺達も手伝うことにな
るけど」

オサムはベッドの横に備え付けられたデジタル時計を
見遣る。角張った緑の数字は四時前を指していた。部屋
で休む前に松江が、集合は午後四時半だと言っていたが、
早めに行った方がいいだろう。

「あと少ししたら行こうか。その前に着替えるよ」

オサムと紫は、銀河邸のラウンジへと向かう。部屋に
は鍵をかけなかった。特に盗まれて困るものはないし、
わざわざこのような環境でバイトの部屋を荒らす者もい
ないだろう。イベント参加者がこの銀河邸にやってくる
のは明日の昼頃だ。

ラウンジへと向かう廊下を歩く二人。彼らには廊下の
突き当たりにある部屋を与えられていた。廊下の片側
は茶色のドアか並んでいる。その反対は窓で、灰色が空
を覆っていた。

オサムはふと、ドアが薄く開いている部屋があるのに
気づいた。オサムは通り過ぎながらさりげなく覗く。

「——っ！」

オサムは声を出しそうになったが、必死になって抑え
た。紫が不審に思って訊いてきたが、彼を黙らせてラウ
ンジへと足早に向かう。

ラウンジの扉まで数歩というところで紫が言う。

「どったの、突然変な動きして」

「いや、それが。部屋の中で……」

オサムが先程見たことを説明する。オサムが部屋を覗
いた時、部屋の中では男女が抱き合っていたのだった。

女性の方はこちらに背を向けていて顔が見えなかったが、男の方は初めて見る顔だった。

オサムは気が気でなかった。あの女性の方が麻由里だったらどうしようという心配に、心を食い破られそうだった。嫌な汗が出る。

「……そりゃ多分、大木くんと志穂ちゃんだねえ」

心の中の死闘の救世主となったのは、背後からの声だった。オサムが振り向くと、そこにいたのは煙草を燻らす松江四郎だった。オサムの話を聞いていたのだろう。

「男の方、結構イケメンだっただろう？」

俺ほどでもないがな、と松江は続け豪快に笑う。オサムはほっとして尋ねた。

「えっと、大木さんと志穂さん？」

「ああ、大木直也おおきなおちや。イベントプロデュース会社のスタッフだな。……『エフエメラ』って会社知ってるか？」

オサムは首を傾げた。紫が死亡フラグみたいと小さく呟いたが、松江は反応しなかった。

「で、女の子のほうたなかが田中志穂ちほちゃん。今回のライブのスタジオオミュージシャンだな」

「なるほど。お二方は付き合ってるんですね」

オサムがそう言うと、松江はチツチツと舌を鳴らす。

「志穂ちゃん、エロいだろ。あれ、人妻なんだぜ……」

ああ、とオサムは納得した。倫理的に不道徳な大人の事情があるわけだったのだ。紫を見やると、どうでも良さげな顔をして窓の外を見ていた。

「ささ、探偵は切り上げて。ラウンジに入ろうな」

松江が煙に目を細めながら言った。

「あ、そういえば」オサムは思い出したように松江に訊く。「俺たちは今日、具体的には何をお手伝いをすればいいのでしょうか」

「ああ、今日は別に何もなくていいよ」松江はニヤリと笑う。「ただ、もしかしたら麻由里を守ってもらうこともあるかもな。……憎きストーカー野郎の手から」

それを聞いてハツとなるオサム。と、外を見ていた紫が突然言う。

「松江さん、ここって禁煙じゃないんですか」

彼はポケットから携帯灰皿を取り出し、内緒など言って火を消した。

続きは「非実在探偵小説研究会 1号」
でお楽しみ下さい。